

「世の中」をよくするために

倫理研究所 理事長 丸山敏秋

「現象界のものすべてが尊いものである。共尊共栄である」

（丸山竹秋「地球人と倫理の基礎」）

猛威をふるうウイルスに、人間はとも太刀打ちできません。新型コロナウイルス感染症は、あろうことか世界の国々の門戸を閉ざし、人々を分離させ、ごく狭い範囲に閉じ込めてしまいました。そのような事態に遭遇するのは、誰もが初めてです。

倫理法人会のおもな活動は、皆が会場に足を運び、顔を合わせ、声を発しながら、倫理経営の学びを深めていくことに特徴があります。会合や集会ができなくなると、手足が麻痺したように、身動きできなくなってしまうます。

しかし昔と違って、ITの時代です。インターネット回線を活用すれば、離れていても面談できたり、会議や集会を開くのも可能。非常時にはそれが威力を発揮することがよくわかりました。もちろんネットによる間接交流には限界もあり、至近距離でしか伝えられない「見えない情報」があるのも事実です。早く以前のように、皆様と温かく触れ合うことができるよう、切に願わずにおれません。

*

全国に緊急事態が宣言されるような非常時には、今まで見えなかったものが見えたり、知らなかったことを知るようになります。その一つに、倫理法人会の会員の方々の意識の違いがありました。

倫理法人会の母体である倫理研究所は、公益事業を行う一般社団法人として認定された社会教育団体です。ゆえに一般企業のような、営利を追求し、構成員への利益分配を目的とした法人ではありません。そのことをよく理解されている方

と、あまり理解されていない方との差がかなりあることが、はっきりわかりました。

前々回にも触れたように、戦後まもない時期に、丸山敏雄が倫理研究所の前身である「新社会」を設立するとき、株式会社や財団法人ではなく「社団法人」を選択しました。「社」とは人のことです。多くの人々に呼びかけ、賛同者に会員となっていたいただき、その会費を財源とした公益事業を展開しようと企図しました。以来、長く個人会員だけでしたが、一九八〇（昭和五十五）年に法人会員が制度化され、倫理法人会が誕生したのです。

なお、世の中には正体不明の怪しい公益団体が多数存在していたこともあって、二〇〇六（平成十八）年五月に「公益法人制度改革関連二法案」が成立し、翌々年の十二月から施行されました。倫理研究所としては、事業内容がかなりの制約を受ける公益社団法人ではなく、種々多様な事業を行ってきたことから、その継続発展のために一般社団法人を選択し、改めて内閣府から移行認可を受けたのです。

公益法人の事業は、不特定多数の利益を目的としています。倫理研究所の場合、その目的は定款の第四条にこう定められています——「倫理の研究ならびに実践・普及により、生活の改善、道義の高揚、文化の発展を図り、もって民族の繁栄と人類の平和に資する」。気宇壮大な目的で、創始者が作られた文言をそのまま用いています。

倫理（おもに生活法則の「純粹倫理」）の「研究」は、倫理研究所（「本部」と呼ばれている）に籍を置く研究員や専従研究者が担います。「実践」「普及」を担うのが、主として会員の皆様です。そして法人会員組織であれば、法人局に属

（次ページにつづく）



する担当研究員たちが各方面の役職者や会員の方々をリードしたり、共に活動を盛り上げていきます。つねに私たちの視線が向かうのは、現在と未来の「世の中」にほかなりません。「純粋倫理」に基づく倫理経営を自ら学び、実践し、その仲間が増えていくことにより、世の中をよりよくしていくための活動を各地で展開しているのです。

*

そのほかにも倫理研究所では、二大スローガンに掲げている「日本創生」「地球倫理の推進」に基づいた公益事業を展開してきました。地球倫理推進賞の贈呈、中国内モン古自治区の沙漠緑化、しきなみ子供短歌コンクールの主催、教育支援や研究助成等々、個人では不可能な事業を、皆様からの会費を財源に、会員の方々を巻き込みながら継続発展させてきました。

全国で展開されている経営者モーニングセミナーをはじめとする倫理法人会の諸活動は、すべてが公益事業にほかなりません。しかし会員の方々のほとんどは一般の営利法人の経営者ですから、公益法人についてよく理解されていないのは致し方ないでしょう。倫理法人会が全国二万社を達成した二十二年前に、ある懇親会で名刺を交換した参加者から耳打ちされた言葉を思い出します——「倫理研究所は会員数がどんどん増えて、えらく儲かっていますね。驚きました。「儲かる」とは、営利法人にはあてはまって、公益法人にはふさわしくない表現です。ともあれ、公益法人のことをよくご存じない人が多いのは、昔も今もあまり変わりがないでしょう。これからも色々な場で、理解を深めていただくよう努めてまいります。

*

世の中をよくするためには、そう願う人々や団体が協力し、さまざまな方面から、いくつもの方途で取り組みねばなりません。倫理研究所の場合はそれを、「純粋倫理」をベースにした諸活動を通して行っているのです。

では、現下の新型ウイルスによる一大災厄に対して、どんな貢献ができるでしょうか。それもまた「倫理」に基づく自覚と実践を喚起することが主となります。このような非常時だからこそ、『万人幸福の葉』十七カ条に集約された生活法則が身にしみます。あるいは、第二代理事長だった丸山竹秋が提唱した「地球倫理」の理念——「調和協調」「自己共存」「共尊共栄」——に基づいた行動が求められます。

たとえば、人類の誕生以前から地上に存在してきたウイルスを、敵対視して撲滅しようとしても、逆に手痛い反撃を食らうだけでしょう。無数の種類があり、人間にとって病原性ウイルスは悪玉ですが、何の病気もおこさない温和なウイルスの方が圧倒的多数だそうです。たとえ悪玉ウイルスでも、それと「共存（共尊）」するのが正しい在り方で、先祖たちはそうしてきました。

事実、今やそれしか選択肢がないではありませんか。感染の徹底防止と経済危機の回避は、あちらを立てればこちらが立たず、両方立てれば共倒れとなるトレードオフの超難題です。互いに努めて感染から身を守りながら、同時に、生活を維持する経済活動も徐々に再開していく。それが共存の道です。さまざまな活動再開に向けて本格的なゴーサインが発せられるのは、そう遠い先ではないと思われれます。

(次頁に「地球倫理」についての一文を掲げておきます)

【参考】

丸山竹秋が著した「地球倫理」に関する種々の論文から抜粋します。

◇地球人の、地球人による、地球人のための倫理。これを地球倫理と呼ぼう。

地球人とは、もちろんこの地球に生活するすべての人々のことだが、犬や猫のものでなく、鳥や虫などのものでない、人間のものにほかならないから「地球人の」と言う。また倫理とは実践をしてはじめて意義をもつのであるから「地球人による」と言う。さらに「この実践によって人々の生活が立派となり、地球それ自体の秩序が保たれ、平和社会が建設されるから「地球人のための」と言う。そこでかたんに言えば地球人倫理となるが、倫理とは人間のおこなうべきものであるのはわかりきっているから人を省いて「地球倫理」としたのである。したがって世界倫理と言っても同じ内容となる。将来、宇宙空間にも多くの人間が生活するようになれば宇宙倫理ということになる。

この倫理はたんなる倫理道徳とはちがって、生活の基盤となるものだ。有っても無くても、たいしたがいはないとか、堅くるしいばかりで役に立たないとか、そんな狭い意味のものではない。毎日毎日それによらねば生きてゆけないし、働くことも、遊ぶこともできない生活原理のことなのだ。

◇人格の錬磨、心境の向上、自己の使命の確認、自己実現、個性の発揮その他いろいろな目標がある。これらは大切なことであり、日々心がけるべき内容である。しかしこれらは、どちらかといえば個人的なことである。もちろん自己の実現がそのまま社会のために役立つこともあるし、個人の人格の錬磨が政治や経済に大きな影響を与えることも当然である。しかし、目標の広さ、内容の深さにおいて地球人の生命および地球それ自体の安泰を自ざすことには遙かに及ぶまい。

◇もともと地球と人間は一体的なもので、独立して分けて存在することはできない。その地球を汚せば、それが人間に返ってくるのは当然ではないか。人間を始めすべて存在するのは、地球という場所を離れることはできない。地球を離れば、地球外の場所に居ることとなるが、地球人は地球上にあって他の存在物と別個に、そのみで単独に存在することはできない。もともと生基（元基）でつながっているのである。自他共存、調和協調しなければ存在し得ない。その意味から現象界のものすべてが尊いものである。共尊共栄である。

◇この地球をより美しく、より快適に、そして調和のあるものにしてゆくのは、私たち人類の使命である。地球倫理とは、そうやって地球をより立派なものにしてゆくための、人類の倫理のことをいう。個々にみれば、私たち一人ひとりが実際にできることをどうやるかという問題なのだ。